

骨・関節 X 線写真の撮りかたと見かた 第 7 版

堀尾重治 ● 著

〔評者〕鳥巢岳彦 (九州労災病院長/大分大名誉教授)

この本は 1986 年の初版出版以来好評で、改訂作業が重ねられ、今回第 7 版が上梓された。X 線検査の方法とその意義、それに画像の読み方に重点がおかれている。身体の各部位ごとに、新たに書き下ろされた約 180 点を含む 600 点以上の著者自筆の細密画が挿入されおり、視覚的にも理解しやすい。

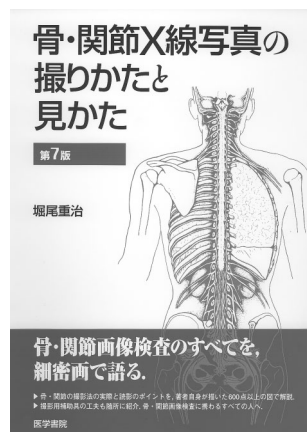
まず、20 年にわたり貴重な執筆を継続され、臨床医や放射線技師の育成に力を注がれた著者の堀尾重治氏の熱意とご努力に、敬意を表したい。

骨・関節疾患の画像検査の中で、X 線撮影は必須のしかも最も基本的な検査であることは医師であれば誰にでも理解できる。しかし、日常診療で頻繁に行われる検査でありながら、臨床医は単に 2 方向撮影や斜位撮影をオーダーするだけで、撮影方法に関心を示す医師は意外に少ない。病変を的確に描出するには、まず、X 線の入射方向や照射軸の位置や撮影肢位が重要である。本書には舟状骨骨折の描出には手関節の軽度背尺屈位での撮影がよいなどが、随所に

図示されていてありがたい。

目的の病変を X 線撮影で描出するには、それなりの努力と工夫が必要で、部位ごとに特殊な撮影方法が求められる。例えば、高齢者の膝関節痛で変形性関節症を疑った場合、通常の臥位での 2 方向撮影では初期病変を見落としやすいし、大腿脛骨関節の関節軟骨のすり減り具合を的確に判定することは不可能である。正しく診断するには、立位での撮影や Rosenberg 撮影が不可欠である。また、スポーツで膝関節を痛めて患者が来院したとき、単純 X 線撮影で骨折がない場合には安心して漫然とした診察になりやすい。靱帯が完全に断裂していても単純 X 線撮影では判断できない。捻挫(靱帯損傷)を診断するにはストレス撮影が不可欠である。この本にはそれらが網羅してある。

画像の細密画は圧巻である。色を塗り分けてあるのでわかりやすい。正常像と異常像が比較できること、筋腱附着部を図示し骨折の転位骨片を解説してあること、X 線撮影での病変部位を CT 像や MR 像の模式図入りで対比できる



ことなど、日常診療で診察机に置いて活用したい本である。

患者さんへの説明の際に、X 線写真そのものよりも図解すると理解されやすい。そんな時、この本があると役に立つ。ぜひお勧めしたい。

B5/頁 476/2007 年

定価 6,510 円

(本体 6,200 円+税 5%)

医学書院刊